

認知症高齢者のトータルケアー脳・生き方・暮らしが交錯する場の知

<シンポジウム趣旨>

『認知症高齢者のトータルケアに関する学際的研究』とタイトル化された本研究は、平成19年度に文部科学省学術フロンティア推進事業として採択されました。看護学・医学・歯学・心理学・社会福祉学・社会学・人類学・経済学・哲学・運動科学という10分野の研究者が、これまで地道に研究を積み重ねてきました。各プロジェクトにおける主たる研究内容は、三つに集約されます。一つは、認知症の人々の地域生活を支える町づくりという認知症の人々をとりまく環境の研究です。二つ目は、彼らの摂食・咀嚼・嚥下機能の評価をもとにした食事を摂ることへの取り組みと睡眠と覚醒状態のアセスメント指標の開発という認知症高齢者の身体に焦点をあてた研究です。三つ目は、認知症の人々から生活世界はどのように見えているのか、その見え方を支持する看護ケアとはいかなるものか、また彼らがターミナル期を迎えた時、音楽療法はどんな役割を果たすのかという、認知症の人々と周囲との関係に関する研究です。

以上のような認知症高齢者の「環境・身体・関係」という3領域を網羅することによって、彼らのトータルケアを築いていくという目論見が本研究の底流にあります。そして、「環境・身体・関係」は、環境と身体、身体と関係、関係と環境、それぞれが関連して、つまり相互に作用しています。また、「環境・身体・関係」も、その一つ一つに人間と周囲との相互作用という事態が組み込まれています。「相互作用」は二重の意味で内包されているのです。たとえば、環境に焦点を当てている町づくりに関する研究においては、認知症高齢者と町を切り離してみなければ、研究は不可能になってしまいます。暮らし、つまり、住まって、食べて、眠って、活動してという人としての動きと相互に関連する、あるいは相互作用する時空というものが想定されて実現するものです。二つ目の研究である摂食・咀嚼・嚥下、そして睡眠と覚醒に関する研究もまた、今述べた暮らしの中核をなす、動く身体と食物、動く身体と自然界のリズムとの相互関連を捉えようとするものです。そして三つ目の研究は、一つ目の研究の当事者版的性格をもっています。つまり、認知症高齢者を中心に据えたときに立ち現われてくる世界の全貌をとらえた時、彼らとの相互作用の仕方がおのずと了解されてくるというケアの考え方が前提にあります。

本研究が学際的なものであることは言うまでもありませんが、根源的には、認知症高齢者のトータルケアを構築していくためには、「閉じられつつ開かれている」人間の生活全体を、「環境・身体・関係」のみならず、その間の相互作用という観点から見ていく研究を目指していると言えます。

こういった考え方が本研究の基盤にあるとはいえ、現実的には、「身体」は“脳機能と行動”をその典型とする理系の知、人の“生き方”としての「関係」、「暮らし」という「環境」に象徴される文系の知という分野縦断的な研究という形をとってしまいがちです。私たちがこれまでの研究活動のなかから見出したことは、こういった分野縦断的な研究でわ

かってくることもあるが、文系の知と理系の知を横断することによって見えてくるものがあるということでした。それこそがトータルケアの構築を促してくれるのではないかと思います。いわば、「ケア研究」とはわざわざ「トータル」と銘打つものではなく、本来的に学際的なものであるという考え方に至りました。

その意味で、今回のシンポジウムでは、文系の知と理系の知、そして両者の融合知の観点から、認知症の人々ケアを素材にしながら、ケア研究というものを広く、深くディスカッションしていくという企画をたてました。

シンポジウムには、社会の具体的な問題と哲学をつなげる試みとしての臨床哲学を提唱していらっしゃる鷺田清一氏、文系の知と理系の知の融合という観点から情報学の西垣通氏、そして高次脳機能科学から認知症研究をしておられる中川賀嗣氏の3氏にご登場していただきます。

鷺田氏には、ご著書『老いの空白』に「認知症という問題が、〈老い〉の思考をめぐる一つの試金石として出てくる」といみじくも記述なさっているように、「認知症の人々の生のありよう」をどう考えるかについてお話いただきたいと思っています。

中川氏には、脳機能と各種行動との関係について、疾患という **attack** する側と脳という **attack** される側の相互作用として、認知症の人々にみられてくるさまざまな行動を素材にしてお話いただきます。

西垣氏には、認知症理解を促す「相互作用」のバリエーションとして、オートポイエーシスやアフォーダンスなどの考え方をご紹介いただきながら、「環境・身体・関係」がどのようにつながれていくのかについての示唆をいただければと願っています。

本シンポジウムが、お話いただくお三方にとっても、お話に参加される聴衆の皆様にとっても、また、ケアという相互性のただなかにいらっしゃる当事者と介護をなさっている皆様にとっても、そしてケア研究に携わっている研究者にとっても、それぞれの考えを揺さぶる貴重な機会になることを願っています。